

319 抗BrdU monoclonal 抗体の標識率よりみた婦人科悪性腫瘍細胞の増殖動態の解析

岩手医大

金子重信, 井筒俊彦, 松田壮正, 利部輝雄,
西谷 巖

〔目的〕腫瘍の悪性格を知ることは、その発育増殖動態を把握できるだけでなく治療方針あるいは予後にたいしても重要な情報を得ることができる。近年、細胞増殖の基盤となるDNA合成細胞を認識できる抗BrdU monoclonal 抗体が開発され腫瘍の成長解析に有用な手がかりを与えるものとして注目されている。われわれは、この monoclonal 抗体を用いて、卵巣癌、子宮内膜癌および子宮頸癌における腫瘍細胞の増殖動態を解析し、その悪性格を知る目的で本研究を行った。

〔方法〕卵巣癌17例、子宮内膜癌11例、子宮頸癌14例の婦人科悪性腫瘍症例にたいしBrdU 500 mgを肘静脈より投与した。投与1時間後にこれらの症例より検体を採取し、Flow cytometry(F.C.M.)および酵素抗体法により腫瘍細胞中の抗BrdU monoclonal 抗体陽性細胞の標識率を算定した。

〔成績〕FCMによる抗BrdU 陽性S期細胞の割合と、酵素抗体法による抗BrdU 標識細胞(BrdU Labelling index)の割合は、卵巣癌17例ではそれぞれ平均5.6%および13.7%であり、子宮内膜癌11例では平均8.1%および11.1%、また子宮頸癌14例では平均5.5%および10.3%であった。

〔結論〕以上の結果から、婦人科悪性腫瘍において卵巣癌、子宮内膜癌では悪性度の高い腫瘍ほど標識率が高い傾向が認められた。一方、子宮頸癌においてはその傾向は認められなかった。

320 生殖器癌における DNA aneuploidy の検索

山口済生会病院*, 山口大

末広泰子*, 津山重夫, 小林正幸, 森岡 均,
加藤 紘

〔目的〕Flow cytometry により生殖器癌の DNA aneuploidyを検索し、診断や予後判定における有用性について検討した。

〔方法〕対象は進行した婦人科悪性腫瘍55例(子宮頸癌23例,子宮体癌11例,卵巣癌21例),良性上皮16例(子宮頸部7例,子宮体部6例,良性卵巣腫瘍3例)で手術時または生検にて採取した組織を単離後エタノール固定し propidium iodide で染色し FACS III にて測定した。一部に癌細胞陽性の腹水及び腔部擦過細胞も検体とした。血中 SCCは SCCリアキットにて測定した。

〔成績〕① 良性上皮はいずれも DNA aneuploidy がみとめられなかった。② 癌組織における DNA aneuploidyの陽性率は子宮頸癌12/23(52.2%),子宮体癌2/11(18.2%),卵巣癌16/21(76.2%)であった。また、腹水は陽性率が低く、腔部擦過細胞はCVが不良であった。③ 卵巣癌では16例中3例に部位によりDNA INDEX(DI)の異なるheterogeneityが存在したが、子宮癌では認められなかった。④ いずれの癌もDIの程度と組織型、組織分化度との間に相関は認められなかった。⑤治療後2年以上経過した卵巣癌15例のうち aneuploidy陽性12例中9例(75%)は死亡したが、aneuploidy陰性3例は健在である。⑥治療後2年以上経過した子宮頸癌19例のうち aneuploidy陽性10例中2例(20%)と陰性9例中3例(30%)が死亡した。SCC陽性(2.0ng/ml以上)は10/16(62.5%)であり、SCC値とDIの間に相関はなかったが、死亡した5例中4例はSCCが高値であった。

〔結論〕DNA aneuploidyの検索は卵巣癌において診断、予後推定に有効であったが、子宮癌における有用性は低く腫瘍マーカー等の併用が望まれた。